どっちが本当！？

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どつちが本当!?

【Nコード】

N8783H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

萩原華はクラスではとても気が強くてきつい性格の女の子だ。ところが寮の後輩達や部活での評判や態度は。人は色々な顔があります。

第一章

どっちが本当!?

置久保裕二郎は驚いていた。相手のその剣幕にだ。

「だから言ってるじゃないの!」

向かい側にいてそのえらい剣幕を見せているのは同じクラスにいる萩原華である。

華は背はわりかし高く茶色がかった黒髪をロングにしている。厚めの唇に太いややげじげした眉をしているが日本人離れしていると言ってもいいはつきりとした目鼻立ちをしていてかなりの美人である。しかも脚もすわりとしており胸も腰の辺りもかなりのものだ。誰が見てもはつきりと言える美人である。

しかしそれだけに怒るととてつもない剣幕を見せていた。その剣幕に裕二郎も驚いているのである。

「あの、そんなに怒ることないじゃない」

「怒ってないわよ」

とは言っても今にも火を吹きそうである。

「別にね」

「そうなんだ」

「とにかくね。絶対に駄目よ」

華はあくまで引かない様子だった。

「それはね。絶対に駄目よ」

「わかったよ」

「やったら只じゃおかないからね」

華の言葉はさらに続いていた。

「どうなるかわからないわよ」

「わかったからしないからさ」

裕二郎はその大柄の身体にもかかわらず完全に華に圧されてしまっていた。たじたじとなっている様が完全に出てしまっていた。

「もうそれはさ」

「よし、じゃあいいわ」

これでやっと納得した感じの華であった。

「これで話は終わりね」

「そうだね」

まさにやれやれといった感じの裕二郎であった。ほっと胸を撫で下ろしてさえている。

「これでね」

「わかつたらいいのよ」

華は如何にも気の強そうな顔で裕二郎を見上げて言う。彼は背は一八〇を超えていてかなりの筋肉質である。顔は顎がやや長くホムベースを思わせる形をしているがその顎の先が尖ってはおらず角ばっている。眉も目つきも強いものがあるがその目の光は穏やかなものである。髪は短く刈っついていてそれが実によく似合っている。一目見ただけで強そうだがそれでも華には完全に気圧されてしまっているのだった。

その華はさらに言うのだった。

「全く。最初からそう言えば話しなくても済んだのに」

こう言っただけで去る華だった。裕二郎はその背を見送るだけだったがその彼にクラスの中の男連中が集まってきてこう声をかけるのだった。

「相変わらずすげえな」

「まるで鬼だな」

「夜叉っつていうのか？」

その華の剣幕のことを言っているのは言うまでもない。

「怒るとすげえな、本当に」

「っつていうかいつも怒ってるよな」

「怖いよなあ」

皆苦笑いで言い合う。裕二郎は黙っているが彼等の話を聞いてはいた。

「折角顔はいいのにな」

「スタイルはいいしな」

「脚だつてな」

実際に華はクラスでも美人で評判である。スタイルのよさも有名でとりわけブレザーの制服のミニから見えるその脚線美が絶品だった。しかしであった。

彼女に声をかける男はいなかった。理由は簡単であまりにも怖かったからだ。それで折角の美人が台無しだという言葉もあった。

「あれで性格が穏やかだつたらな」

「言うことなしなんだけれどな」

「全くだよ」

これが彼等の華への印象だった。しかも彼女が強いのは気だけではなかった。

「古武術だつたか？」

「ああ、それやってるつてな」

武道もたしなんでいるのである。

「部活は空手だしな」

「しかも主将だろ？女子の」

「三段だつてよ」

つまりかなり強いのである。容赦ないまでに。

「あれじゃあ本当に誰も言い寄らないよな」

「実際痴漢をのしたことあつたしな」

「おい、そんなこともあつたのかよ」

「何でも中学校の時な」

彼女の中学校時代のごとは既に伝説になっているのだった。

「電車の中で胸触ってきた奴をな」

「一撃か」

「みぞおちにこれだつたらしいぜ」

一人が実際にみぞおちに拳を放つ動作を見せてきた。その動きはあまり速くはなかったが周りには華がそうした光景が目映ったのだった。

第二章

「一発でな」

「えぐいなあ」

「やっぱり怖いよ」

「置久保よ」

彼等は華の話をしながら裕二郎にも声をかけてきた。

「けれど御前なら勝てるんじゃないのか？」

「柔道で優勝してるんだろ？確か」

「それはそうだけれど」

裕二郎はここではじめて頷くのだった。それまで黙って聞いていただけだったがここでやっと口を開いて応えたのである。

「けれどさ」

「あの剣幕には勝てねえか」

「御前力はあるけれど気は優しいからな」

「気は優しくて力持ちってな」

それが彼だった。彼は気の優しい性格で知られているのである。

「御前とは相性が悪いよな」

「今回も押し切られたし」

「俺はいいけれどさ」

彼はまずはこう皆に述べた。

「けれど。いつもあんななのかな」

「萩原か？」

「いつもあんなのかつてか」

「どうなのかな。その辺りは」

「こつ皆に尋ねるのだった。」

「確か彼女寮だったよね」

「ああ、女子寮な」

「よその県から来てるからな」

この学校は全国から生徒が集まる学校である。だから他の県から来る生徒の為に寮もあるのである。その寮にいるといつのである。

「だから寮だけだよ」

「そういや。どんななんだろうな」

「やっぱりかなり怖いのかな」

裕二郎は首を捻りながら述べた。

「寮でも後輩の娘達に」

「そうに決まってるだろ」

「絶対にそうだろ」

男連中はこう確信していた。華がクラスでいつも見せるその剣幕を見ているからこそその確信であった。これも無理のないことだった。

「後輩にとつてもおっかない先輩だと思っぜ」

「ありゃあな」

「女子寮のことはよく知らないけれど」

裕二郎は首を捻り続けながらまた言った。

「あれじゃあね。本当にね」

「怖がられてるだろうな」

「マジでな」

こんな話をする彼等だった。裕二郎も確信していた。しかしそんなある日のこと。彼が学校の食堂で昼食を食べているとすぐ傍からこんな話が聞こえてきたのだった。

「萩原先輩がね」

「そうよね」

華のことを話している、裕二郎にはすぐにわかった。彼はうどんを啜りながらその話に耳をそばだてた。

「いつもね。丁寧に教えてくるし」

「穏やかにね」

「穏やか!？」

裕二郎は今の彼女達の言葉を聞いて思わずうどんをすすする口を止めてしまった。

「彼女が穏やかかって!?!」

「優しいしね」

「絶対に怒らないしね」

「いや、それ絶対に嘘だよ」

彼は思わず言ってしまった。話をするその彼女達に顔を向けて全否定した。うどんをすすするのも途中で顔を向けてかなり大変なことになっていたがそれには構わなかった。

「萩原さんがそんなことって」

「あれ、柔道部の置久保先輩ですか?」

「ひよつとして」

彼は学校でも有名人だった。身体が大きくて目立つだけではないがそれ以上に柔道の全国大会で優勝している為それで有名になっているのだ。

「いや、僕は」

「確か萩原先輩と同じクラスですよね」

「いいですね」

「いいつて」

彼は彼女達の今の言葉にも目が点になってしまった。

「いいんだ。一緒のクラスで」

「だってあんなに優しい人ですよ」

「私達先輩にとっても感謝してるんですよ」

彼女達は実に晴れやかな笑顔でこう語るのだった。

「親切に教えてくれますし」

「何があっても怒らないで丁寧ですし」

「親切で怒らなくて丁寧って」

とりあえずそれは彼はおろかクラスの皆が否定する項目であった。

「そうなんだ」

「よく気が利く人ですし」

「ああいう人になりたいですね」

「あの、君達って」

戸惑ったまま彼女達にまた問う彼だった。

第三章

「やっぱりあれ？寮生なんだ」

「はい、一年生です」

「私先輩と同じ部屋です」

そのうちの一人はにこりと笑って裕二郎に言ってきた。

「本当に奇麗で優しい人で。私一緒の部屋で感謝してるんですよ」

「一緒の部屋だったんだ」

「そうです。一緒の部屋です」

「それが羨ましいのよね」

もう一人はその彼女にこんなことを言うのだった。

「あんないい人と一緒の部屋になれるなんて」

「いい人って」

これまた裕二郎には思いも寄らない言葉だった。

「そうだったんだ」

「クラスでもそうですよね」

「凄くいい人ですよね」

「ええと」

にこやかな笑みの女の子達に問われてまずはどう返答しているのか困惑した裕二郎だった。少なくとも彼は嘔吐きではないのだ。

「それはね」

「あんないい人いませんから」

「羨ましいですよ」

別の娘を華と同室だからと羨んでいたその娘がここでこう言ってきた。

「先輩と同じクラスなんて」

「本当に」

「そうだね」

嘘をつくのは嫌いなので隠すことにしたのだった。大して変わり

はないのかもと思ったがそれでもこの選択を選んだのであった。

「うん」

「あの人が先輩でよかったですよ」

「全くです」

彼女達はこう言つて華を絶賛していた。このことがどうしても納得できない裕二郎は仲間達にこのことを話した。すると皆は。

「そりゃ何処の平行ワールドの話だ？」

「嘘だろ」

皆こう言つてその話を信じようとしなかった。

「萩原が優しい？」

「あんないい人いないって？」

「そうなんだ」

こう皆に話す裕二郎だった。

「俺もまさかつて思つてるけれど」

「後輩の娘達無理矢理言わされてるじゃねえのか？」

「なあ」

男連中はこう言つたのだった。

「絶対そうだよ」

「あんな怖い奴いねえって」

「俺もそう言おうつて思つたんだけれどな」

また言う裕二郎だった。

「ちよつとな。言えなくてな」

「そうなのかよ」

「まあとにかくな」

「その話は絶対に嘘だ」

彼等は確信していたのだった。

「俺は信じないからな」

「俺もだ」

「天地がひっくり返つても有り得ねえ」

彼等は口々に言う。

「あいつが優しいなんてな」

「ねえねえ」

「ちよつとそこの男連中！」

言っているそばから華の怖い声が飛んできた。

「ちゃんとお掃除しなさいよ。何やってるのよ！」

「いけね」

「鬼だ」

「誰が鬼よ誰が！」

また華の声が飛んできた。見れば彼女も男連中も華以外の女の子もそれぞれ箒なりモップなり雑巾なりを持っている。そのうえでクラスを掃除している。

「本当に何やってるのよ。つべこべ言わずにお掃除しなさい！」

「わかったからよ」

「そう怒鳴るなよ」

「怒鳴ってなんかないわよ！」

まさにその怒鳴っている人間の言葉である。

第四章

「とにかくお掃除しなさい。いいわね」

「ああ、じゃあな」

「やるからな」

その後輩達が言うには優しい彼女の剣幕に従うしかなかった。裕二郎は掃除を再開しながら彼女の方を見た。彼女自身も真面目に掃除をしている。

その彼女を見て裕二郎は思うのだった。果たして後輩達の言う彼女は本当に存在するのかと。だがそれを自分の目で見る時が来たのだった。

「今日は部活前にだな」

「はい」

顧問の先生が裕二郎と他の柔道部員達に言っていた。

「空手部の手伝いをしてくれないか」

「空手部のですか」

「今空手部の部室の大掃除をしているんだ」

「このことを彼等に話すのだった。」

「その手伝いをして欲しいんだ」

「はあ」

「悪いな。向こうからのたつての願いだ」

少し申し訳なさそうに裕二郎達に話す。

「手が足りないらしくてな」

「ひょっとして部室だけじゃなくえ道場もですか？空手部の」

「そこも掃除するんですかね」

「ああ、そうらしいな」

顧問もそうだと述べる。

「どうぞやらな」

「まあ空手部とはいっても仲良くなってるからな」

「いいか」

部員達からこうした言葉も出て来た。

「それじゃあいいな」

「はい」

「いいですよ」

裕二郎だけでなく皆その言葉に頷いた。

「それじゃあそういうことで」

「わかりました」

こうして彼等は空手部の手伝いでその部室や道場を掃除することになった。すぐに顧問に連れられて現場に向かう。現場には当然ながら女子空手部の主将である華もいた。

「うわ、萩原かよ」

「そっぴやあいつ空手やってたな」

柔道部の三年の間からうんざりしたような声があがった。華は既に空手着に着替えている。その長い髪をポニーテールにしてまとめ、帯は黒帯である。その姿はかなり凛々しく同時に強い美しさもあった。

「こりや真剣にやらないとな」

「何時怒鳴られるかわかったものじゃないぜ」

「全く」

「じゃあ男子はこっちで女子はそっちな」

空手部の顧問の若い先生が彼等に言ってきた。

「それで柔道部は悪いけれど肉体労働頼むな」

「ええ。その為の柔道部ですからね」

「わかりました」

皆少し苦笑いを浮かべてみせて彼の言葉に応えた。そうしてそのうえで部室の奥にあるもう使わない大道具やそういったものを捨てたり運んだりしていた。当然ながら裕二郎もそれに加わっており真面目に作業をしていた。そうして物を運んでいる時だった。

女子空手部の面々が掃除をしている場面が見えた。その中心にい

るのは華だ。

主将である彼女は自分も雑巾を持ちながら動き回っている。そうして動き回りながらそのうえで部員達に対して言っていた。

「そうよ。そこはね」

「こうするんですね」

「ええ。そうよ」

温厚そのものの笑みで後輩の部員に対して言うのだった。

「そうやってね。丁寧に拭いてね」

「わかりました」

「ゆっくりでいいから」

そしてこうも言うのだった。

「ゆっくりしていいからね」

「けれど時間が」

「焦らなくていいの」

少し垂れたようにまで見える優しい目での言葉だった。

「焦ったら怪我したりするから」

「先輩がいつも仰ってることですね」

「ふふふ、そうね」

優しい笑みさえ浮かべていた。

第五章

「そういえばいつも言ってるわよね」

「だから肝に銘じておきます」

後輩もリラックスした顔で返すのだった。

「そのことは」

「御願いな。怪我だけはしないでね」

今度は真面目な顔になる華だった。そのことを念押しするかのようだった。

「それだけはね」

「わかりました」

「それじゃあ」

後輩達は彼女の言葉に頷いてそのうえで掃除に励んでいた。それを見た柔道部の後輩達がそれぞれ言うのだった。

「へえ、あの人綺麗だよな」

「それに優しい感じだよな」

「ああ、俺あの人知ってるぜ」

ここで後輩の一人が仲間達に話すのだった。

「あの人萩原先輩っていうんだ」

「萩原先輩っていうのかよ」

「女子空手部の主将だぜ」

このことを仲間達に話す。

「何か部活でも寮でも凄く優しい人らしいぜ」

「綺麗で優しいのか」

「本当かよ、それ」

「俺寮にいる彼女に聞いたからよ」

だから知っているというのである。

「本当だぜ。すごいいい人なんだってよ」

「そんな人もいるんだな」

「顔がいいだけじゃなくてな」

後輩達は彼の言葉を聞いて素直に華を賞賛していた。彼等にとってみれば華はまさに素晴らしい先輩だった。そして彼等の言葉は裕二郎も聞いていた。

「そうなのか？」

今のも見ても半信半疑どころではなかった。七割は疑っていた。しかし三割は信じる気持ちになっていたのも確かだった。それで次の日クラスで皆にこのことを話すのだった。

「それ聞くと少しは本当に聞こえるけれどな」

「けれどマジか？」

彼等も七割は信じていないのだった。中には八割か九割は信じていないのではないかという表情の人間も入っていた。

「あの萩原が優しいってよ」

「いつも夜叉みみたいに怒るのによ」

「後輩には優しいんじゃないのかな」

ここで裕二郎は言うのだった。

「ひょっとして」

「後輩にはねえ」

「そういうものかな」

こんな話をするのだった。しかし実際に今クラスにいる華を見てみると。クラスの女の子達の中で優しい笑みを浮かべているのだった。

そのうえで話をしている。その表情はとても明るく綺麗なものである。

それを見て裕二郎達は。また言うのだった。

「やっぱり本当は優しいのか？」

「どうなんだろうな」

そしてまた首を傾げるのだった。

「実際のところは」

「どっちとも言えないな」

そんな話をしながら華を見ている裕二郎だったがここで気付いたのだった。彼女の足元にハンカチが落ちていていることに。

「あっ」

「あつて？」

「どうしたんだよ」

「いや、ハンカチが」

それに気付いて皆にも言うのだった。

「落ちてるから。ちよつとね」

「ちよつとつて」

「何処行くんだよ」

皆の言葉をよそに半ば無意識のうちに足を前に出していた。そのうえで華の傍に来てそのハンカチを拾う。そしてそのうえで彼女にそれを差し出すのだった。

第六章

「これ、萩原さんの？」

「あの馬鹿っ」

「どうなつても知らねえぞ」

七割か八割は信じていない面々は今の彼の行動を見て思わず声をあげた。

「どんだけ怒鳴られるかな」

「噛み付かれるか」

完全に華を猛獣か何かだと思っていた。それで思わず言ってしまった。しかしここで彼等もまた見るのだった。その信じられない光景を。

「有り難う」

華はまずはこう裕二郎に言ったのだった。男連中はそれを聞いてまずは大いに驚いた。

「何だと！？御礼を言った！？」

「あの萩原が！？」

鬼は無愛想なものである。だからその鬼が応えてしかも御礼を言ったので驚いたのである。これは彼等の先入観による考えであったがそれでもだった。

「まさか。そんなよ」

「嘘だろ」

皆啞然としている。しかしその啞然はさらに物凄いものになった。何と華が笑つたのだ。裕二郎に対して。その笑みがまたとても優しく柔らかいものだった。

「笑ってるし」

「御礼を言っている笑顔だよな、あれ」

「ああ。しかもよ」

「優しい笑顔だよな」

彼等は確かに見たのだった。その華の笑顔を。自分の目で見たものは流石に否定できなかった。それだけは否定できるものではなかった。

「つてことは」

「まさか」

そのハンカチを受け取る華だった。こうして裕二郎は無事ハンカチを送り届けることができたのである。

そのうえで皆のところに戻ると。その皆が口々に言うのだった。

「やっぱりそうなのかな」

「本当は優しいのか？」

「さあ」

裕二郎は皆の問いにまずは首を傾げさせて応えた。

「今はどうとかは言えないかな」

「言えないっていうのかよ」

「それは」

「とりあえず御礼は言ってもらえたけれどね」

いつもの凄い剣幕ではない華は見たというのである。

「けれど。それだけじゃ何ともね」

「まあ一度見ただけじゃな」

「断定はできないか」

「ただ」

しかしここで裕二郎は言うのだった。

「人の顔って一つじゃないから」

「一つじゃないってよ」

「幾つもあったら化け物じゃねえか」

皆今の彼の言葉にはすぐにこう突っ込みを入れた。

「そんなのよ。二つも三つもあつたら怖いぜ」

「そりゃ人間じゃねえよ」

「いや、そうじゃなくてね」

すぐにその突っ込みに対して返す裕二郎だった。

「優しい顔もあれば怖い顔もあるってこと」

「優しい顔に怖い顔」

「つまり心ってことかよ」

ここで話がわかった一同だった。そう言われればわかるのだった。

「心ってことか」

「そうだよ」

その通りだと答える裕二郎だった。

「俺はそう思うんだけれどな」

「ううん、そうなのかよ」

「どうなんだろうな」

みんな今の裕二郎の言葉にあらためて考える顔になる。

「それは」

「けれど。有り得るよな」

こうした意見も出された。

「置久保は話は下手だけれど嘘は言わないしな」

「ああ、それはそうだな」

「こいつはそんな奴じゃないからな」

人間としてはかなり信頼されている裕二郎であった。

「本当なのかね、やっぱり」

「だよなあ」

「俺こつも思うんだけれど」

ここでまた言う裕二郎だった。

「普段は優しくても怒ると怖いって人なのかもね、萩原さんは」

「そんなものかね」

「まあそういう人もいるけれどな」

これで納得しかけた一同だった。ここでその彼等に華が声をかけた。
「ねえ皆」

「おっ!?!」

「俺達かよ」

「俺達かよ」

「実家からお饅頭差し入れもらったのよ」

「こう彼等に言ってきたのだった。」

「お饅頭。よかったらね」

「ああ」

「お饅頭？」

「皆で食べましょう」

優しい声で彼等を誘ってきた。

「皆で。どう？」

「えっ、いいのかよ」

「御前が貰ったやつじゃないか」

「皆で食べないと美味しくないじゃない」

だが華は優しい笑顔でこう彼等に言うのだった。

「だから。一緒にね」

「そこまで言うんならな」

「それじゃあ」

彼等も華の言葉を受けることにした。そして全員で彼女のところに行く。彼女はそれの彼等にまた声をかけてきたのであった。

「じゃあ私お花の水換えてくるから。先に食べておいて」

「あっ、ああ」

「お花もか」

言うまでもなくクラスの花のことである。花瓶に入れているのである。

「それじゃあね」

こうして彼女は実際に花瓶を持ってクラスを出た。男達はそんな彼女を見送ってからここでも言うのだった。

「やっぱり。置久保の言う通りなのかね」

「かもな。それに俺達が今まで気付いていなかっただけなのかもな」

「そうかも知れないね」

その裕二郎は皆の言葉に頷くのだった。

「今そのことに気付いた。そういうことかな」

「そうか。今気付いたってわけか」

「気付いていなかったことにな」

こう思いはじめた彼等だった。そのうえで彼女が勧めたその饅頭を食べてみる。その饅頭は実に美味かった。塩に包まれその味もするがそれと同時に餡子の甘さが中に詰まっている、そんな饅頭であった。

どっちが本当!?

完

2009・8・22

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8783h/>

どっちが本当!?

2010年10月8日15時15分発行